Ex7.1 Find the Degree of the Two Embedding.

(a) Find the degree of the d-uple embedding of \mathbb{P}^n in \mathbb{P}^N .

記号 $\theta, \rho_d, M_i, N = \binom{n+d}{n} - 1$ は Ex2.12 の物を使う. 計算するのは $\mathcal{M} = S/\ker\theta$ の Hilbert polynomial である. $\mathcal{M} \cong k[\{M_i\}_{i=0}^N]$ かつ $\deg M_i = d$ が Ex2.12 でわかっている. したがって, \mathcal{M}_l は dl 次単項式全体を基底に持つ k-ベクトル空間.

$$P_{\mathcal{M}}(t) = {dt+n \choose n} = \frac{1}{n!}(d^nt^n + \dots).$$

よって deg im $\rho_d = d^n$.

(b) Find the degree of the Segre embedding of $\mathbb{P}^r \times \mathbb{P}^s$ in \mathbb{P}^N .

記号 ψ, ϕ は Ex2.14 の解答で使った物を使う. 計算するのは $\mathcal{N}=S/\ker\phi$ の Hilbert polynomial である. Segre embedding は x_iy_i で parametrize されるから, \mathcal{N}_l は

$$(\{x_i\}_{i=1}^r \cap l 次単項式) \cdot (\{y_i\}_{i=1}^s \cap l 次単項式)$$

と書ける元全体を基底に持つ. よって,

$$P_{\mathcal{N}}(t) = {t+r \choose r} {t+s \choose s} = \frac{1}{r!} \frac{1}{s!} t^{r+s} + \dots$$

なので $\deg \mathcal{N} = \frac{1}{r!} \frac{1}{s!} \cdot (r+s)! = \binom{r+s}{r}$.

Ex7.2 The Arithmetic Genus.

Y :: variety in \mathbb{P}^n , dim Y=r のとき, $p_a(Y)=(-1)^r(P_Y(0)-1)$ を the arithmetic genus of Y とよぶ.

(a) $p_a(\mathbb{P}^n) = 0.$

すでに得られている通り,

$$P_{\mathbb{P}^n}(t) = \binom{t+n}{n} = \frac{1}{n!}(t+n)(t+n-1)\cdots(t+1) = \frac{1}{n!}((\cdots)t+n!).$$

なので $P_{\mathbb{P}^n}(0) = 1$. よって $p_a(\mathbb{P}^n) = 0$.

(b) If Y :: curve in \mathbb{P}^2 and $\deg Y = d$, then $p_a(Y) = \binom{d-1}{2}$.

次の問題の特殊な場合に過ぎないので省略.

(c) If Y:: hypersurface in \mathbb{P}^n and $\deg Y = d$, then $p_a(Y) = \binom{d-1}{n}$.

Prop7.6d $\xi \vartheta$, $P_Y(t) = {t+n \choose n} - {t-d+n \choose n}$.

$$P_Y(0)$$

$$= \frac{1}{n!} [n! - (-d+n) \cdots (-d+1)]$$

$$= 1 + \frac{1}{n!} (-1)^{n+1} (d-n) \cdots (d-1)$$

$$= 1 + \frac{1}{n!} (-1)^{n+1} (d-1) \cdots (d-n).$$

よって
$$p_a(Y) = \frac{1}{n!} (-1)^{2n} (d-1) \cdots (d-n) = \binom{d-1}{n}$$
.

(d) Arithmetic Genus of Compelete Intersection.

 $Y \subset \mathbb{P}^3$ が complete intersection, すなわち $2 \pi f, g \in S$ で $Y = \mathcal{Z}_p(\{f,g\})$ で表せる curve とする. この時,以下は完全列である 1).

$$0 \to S/(fg) \to S/(f) \oplus S/(g) \to S/(f,g) \to 0.$$

Prop7.6d と全く同様に S/(fg), $S/(f) \oplus S/(g)$ の Hilbert Polynomial が計算できる.

$$P_{S/(f,g)}(t) = (P_{S/(f)}(t) + P_{S/(g)}(t)) - P_{S/(fg)}(t).$$

よって S/(f,g) の Arithmetic Genus は $(-1)^1((-\frac{1}{2}ab(a+b-4))-1)=\frac{1}{2}ab(a+b-4)+1$.

(e) Arithmetic Genus of Product Variety.

 $Y \subseteq \mathbb{P}^n, Z \subseteq \mathbb{P}^m$ かつ $\dim Y = r, \dim Z = s$ とする. $Y \times Z \subseteq \mathbb{P}^n \times \mathbb{P}^m$ を \mathbb{P}^N へ Segre embedding で埋め込む. $\mathbf{y} = \{y_i\}_{0 \le i \le n}, \mathbf{z} = \{z_j\}_{0 \le j \le m}, \mathbf{x} = \{x_{(i,j)}\}_{0 \le i \le n, 0 \le j \le m}$ とすると,以下の k-代数としての同型が成り立つ.

$$\frac{k[\mathbf{x}]}{\mathcal{I}_p(Y \times Z)} = \bigoplus_{d \in \mathbb{Z}} \left(\frac{k[\mathbf{x}]}{\mathcal{I}_p(Y \times Z)} \right)_d \cong \bigoplus_{d \in \mathbb{Z}} \left[\left(\frac{k[\mathbf{y}]}{\mathcal{I}_p(Y)} \right)_d \otimes_k \left(\frac{k[\mathbf{z}]}{\mathcal{I}_p(Z)} \right)_d \right]$$

これは次のように示せる.まず、以下の準同型は全射 2).

$$\gamma: k[\mathbf{x}] \to \bigoplus_{d \in \mathbb{Z}} \left[\left(\frac{k[\mathbf{y}]}{\mathcal{I}_p(Y)} \right)_d \otimes_k \left(\frac{k[\mathbf{z}]}{\mathcal{I}_p(Z)} \right)_d \right]$$
$$x_{(i,j)} \mapsto (y_i + \mathcal{I}_p(Y)) \otimes_k (z_j + \mathcal{I}_p(Z))$$

さらに $\operatorname{pr}_{\mathbf{y}}: x_{(i,j)} \mapsto y_i$ とする。 $\operatorname{pr}_{\mathbf{y}}$ に対応して、射影写像 $(p_{(i,j)}) \mapsto (p_{(i,l)})$ が定義できるのでこれも $\operatorname{pr}_{\mathbf{y}}$ と書く。(ただし l はある i について $p_{(i,l)} \neq 0$ であるようなもの。) すると $\operatorname{pr}_{\mathbf{y}}(\mathcal{Z}_p(\ker\gamma)) = \mathcal{Z}_p(\operatorname{pr}_{\mathbf{y}}(\ker\gamma)) = \mathcal{Z}_p(\mathcal{T}_p(Y)) = Y$. よって $\mathcal{Z}_p(\ker\gamma)$ の \mathbf{y} 方向への射影は Y である。同様に \mathbf{z} 方向への射影は Z だから、 $\ker\gamma = \mathcal{I}_p(Y \times Z)$. これで同型が証明できた。

¹⁾ ただし、 $S/(fg) \rightarrow S/(f) \oplus S/(g)$ は $x+(fg) \mapsto (x+(f),x+(g))$, $S/(f) \oplus S/(g) \rightarrow S/(f,g)$ は $(x+(f),y+(g)) \mapsto x-y+(f,g)$ である。 $x-y+(f,g)=0 \iff x+(f,g)=y+(f,g)$ かつ $(f),(g) \subset (f,g)$ だからこれは確かに完全 だい

 $^{^{(2)}}$ 任意の $\prod_{i=1}^d y_{a_i} \otimes \prod_{i=1}^d z_{b_i}$ に対して $\prod_{i=1}^d x_{(a_i,b_i)}$ を取ればよい.

以上の同型から $P_{Y\times Z}=P_Y\cdot P_Z$. 両辺の次数を見ることで $\dim Y\times Z=r+s$ もわかる. なので、以下のように $Y\times Z$ の Arithmetic Genus が計算できる.

$$\begin{aligned} p_a(Y \times Z) \\ &= (-1)^{r+s} (P_Y \cdot P_Z - 1) \\ &= (-1)^{r+s} \left(((-1)^r p_a(Y) + 1) ((-1)^s p_a(Z) + 1) - 1 \right) \\ &= (-1)^{r+s} \left((-1)^{r+s} p_a(Y) p_a(Z) + (-1)^s p_a(Y) + (-1)^r p_a(Z) \right) \\ &= p_a(Y) p_a(Z) + (-1)^r p_a(Y) + (-1)^s p_a(Z) \end{aligned}$$

Ex7.3 The Dual Curve.

 $(\mathbb{P}^2)^* = \{a_0x_0 + a_1x_1 + a_2x_2 = 0 \mid (a_0:a_1:a_2) \in \mathbb{P}^2\}$ とする. Y:: curve in \mathbb{P}^2 とする. また, Y の定義多項式を f としておく.

- (a) Uniquely Existence of Tangent Line.
- \blacksquare deg Y>1 が必要であること. 任意の nonsingular point $P=(p_0:p_1:p_2)\in Y$ に対して, i(Y,L;P)>1 となる直線 L を $T_P(Y)$ と書く. これがただひとつ存在することを示す. まず, Cor7.8(Bézout's Theorem) から,

$$1 \le i(Y, T_P(Y); P) \le (\deg Y) \cdot (\deg T_P(Y)) = \deg Y.$$

したがって $i(Y, T_P(Y); P) > 1$ には $\deg Y > 1$ が必要である.

- ■示すべき主張の言い換え. $Q(\neq P) \in \mathbb{P}^2$ を任意にとり,直線 $L:(x_0:x_1:x_2)=uP+vQ$ ($(u:v)\in \mathbb{P}^1$)を考える。 Q を変えれば P を通る任意の直線がこれで書けることに注意せよ。 さらに L と別に直線 $T:\sum_{i=0,1,2}(\partial_{x_i}f)(P)\cdot x_i=0$ を定義する。 $P\in Y$ は nonsingular point だから Ex5.8 より,これは確かに直線を定義している。 さらに Ex5.8 の Euler's lemma から $\sum_{i=0,1,2}(\partial_{x_i}f)(P)\cdot p_i=(\deg f)\cdot f(P)=0$ なので $P\in T$. i(Y,L;P)>1 であることと $Q\in T$ すなわち $L=T^{(3)}$ であることは同値である。これを示そう。
- $\blacksquare i(Y,L;P)$ の解体. i(Y,L;P) を計算したい、そのためにこの段落で i(Y,L;P) を計算しやすいものへ帰着させる. $I=\mathcal{I}_p(Y)+\mathcal{I}_p(L), M=S/I$ とし、P に対応する S の極大イデアルを \mathfrak{m} とする. $\mathrm{Ann}(M)=I$ であり、 $\mathcal{Z}_p(I)=Y\cap L$ は有限集合なので、 \mathfrak{m} は $\mathrm{Ann}(M)$ の極小イデアル、まず、 $S_\mathfrak{m}$ -加群 $M_\mathfrak{m}$ の組成列を考える.

$$0 = \mathfrak{a}_l \subsetneq \mathfrak{a}_{l-1} \subsetneq \cdots \subsetneq \mathfrak{a}_0 = M_{\mathfrak{m}}.$$

 $M_{\mathfrak{m}}$ は環なので各 \mathfrak{a}_i はイデアルである。Ati-Mac Prop3.11-i) より,これらはすべて拡大イデアルである。したがって以下のように書き換えられる。

$$0 = \mathfrak{b}_{l}^{e} \subsetneq \mathfrak{b}_{l-1}^{e} \subsetneq \cdots \subsetneq \mathfrak{b}_{0}^{e} = M_{\mathfrak{m}}.$$

各 \mathfrak{b}_i は環 M のイデアルである. さらに Ati-Mac Prop3.11-ii) より、 $\mathfrak{b}^e \neq M_{\mathfrak{m}} \iff \mathfrak{b} \subseteq \mathfrak{m}/I \subsetneq M$. また、 $\mathfrak{c} \subseteq \mathfrak{b} \subseteq \mathfrak{m}/I$ については、Ati-Mac Cor3.4、Prop3.8 により、

$$\mathfrak{c} = \mathfrak{b} \iff \mathfrak{b}/\mathfrak{c} = 0 \iff (\mathfrak{b}/\mathfrak{c})^e = 0 \iff \mathfrak{b}^e = \mathfrak{c}^e.$$

³⁾ $P,Q \in T$ であれば、L は T に含まれる独立なベクトルの線形和であることになり、したがって L=T.

なので $S_{\mathfrak{m}}$ -加群 $M_{\mathfrak{m}}$ の組成列から次のようにイデアル列が得られる.

$$0 = \mathfrak{b}_l \subseteq \mathfrak{b}_{l-1} \subseteq \cdots \subseteq \mathfrak{b}_0 = \mathfrak{m}/I.$$

このイデアル列からもとの組成列が得られることは Ati-Mac Prop3.3 から理解る. だから、我々は \mathfrak{m}/I の部分イデアル列として極大な物を考えれば良い.

■ \mathbb{P}^2 から L へ,L から \mathbb{P}^1 へ. 同型定理から $\mathfrak{m}/I \cong \frac{\mathfrak{m}/\mathcal{I}_p(L)}{I/\mathcal{I}_p(L)}$ であり,以下で見るように右辺のほうが扱いやすい.計算すると $I/\mathcal{I}_p(L) = \mathcal{I}_p(Y)/\mathcal{I}_p(L) \subset S(L)$.L は定義から u,v によるパラメトライズを持つから $S(L) \cong k[u,v]^h$. $\mathfrak{m}/\mathcal{I}_p(L)$ をこの同型写像で写すと,

$$\mathfrak{m}/\mathcal{I}_p(L) = (\{p_i x_j - p_j x_i\}_{i,j=0,1,2})/\mathcal{I}_p(L) \to (\{(p_i q_j - p_j q_i)v\}_{i,j=0,1,2}) = (v).$$

- $^{4)}$ ただし $P=(p_0:p_1:p_2), Q=(q_0:q_1:q_2)$ としている。幾何的に見れば,これは \mathbb{P}^2 上の点 P を L 上の点 P とみなし,さらに \mathbb{P}^1 の点をみなしたことになる。同様に $\mathcal{I}_p(Y)/\mathcal{I}_p(L)=(f)/\mathcal{I}_p(L)$ を 写すことで,(f) を $k[u,v]^h$ の元とみなせる。 $\bar{f}=f(p_0u+q_0v,p_1u+q_1v,p_2u+q_2v)$ としておけば, $\frac{\mathsf{m}/\mathcal{I}_p(L)}{I/\mathcal{I}_p(L)}\cong (v)/(\bar{f})$ になる。
- **■再び** i(Y,L;P). $\mathfrak{m}/\mathcal{I}_p(L)=(v)$ の部分加群列を考えよう。まず、明らかに $(v)\subsetneq (v^2)\subsetneq \ldots$ という部分加群列がある。 \mathbb{P}^1 が nonsingular curve であることから $\dim_k \mathfrak{m}/\mathfrak{m}^2=\dim \mathbb{P}^1=1$. (ここだけが curve に特有の議論である。) なので $(v)/(v^2)$ は単純加群であり、(v) と (v^2) の間に更なる部分加群は無い。したがって $(v)/(\bar{f})$ が長さ 2 以上の部分加群列を持つこと, (v^2) が $(v)/(\bar{f})$ の部分加群に写せることは同値である。さらにそれは $(v^2)\supseteq (\bar{f})$ と同値である。
- ■計算と結論. 以上で $i(Y,L;P)>1\iff (v^2)\supseteq (\bar{f})$ がわかった. \bar{f} を計算してみると、dual number での自動微分 $^{5)}$ を考えることにより、以下のように書ける.

$$\begin{aligned}
\bar{f}(u,v) \\
&= f(p_0u + q_0v, p_1u + q_1v, p_2u + q_2v) \\
&= f(P)u^d + \left(\sum_{i=0,1,2} \partial_{x_i} f(P) \cdot q_i\right) u^{d-1}v + \dots + f(Q)v^d \\
&= \left(\sum_{i=0,1,2} \partial_{x_i} f(P) \cdot q_i\right) u^{d-1}v + \dots + f(Q)v^d
\end{aligned}$$

ただし $d:=\deg f$. 最後の等号は $P\in Y=\mathcal{Z}_p(f)$ による. $u^{d-1}v$ の係数が 0 であることと $(v^2)\supseteq (\bar{f})$ が同値であることが直ちに理解る. よって $Q\in T$. これで $i(Y,L;P)>1\iff Q\in T\iff T=L$ が示された.

 $\blacksquare P \in Y$:: singular である時. $P \in Y$:: singular であるとき, $\partial_{x_i} f(P)$ は i=0,1,2 で 0. なので最後に現れる $\sum_{i=0,1,2} \partial_{x_i} f(P) \cdot q_i$ は任意の Q について 0 となる.したがって P を通る任意の直線 L について i(Y,L;P) > 1 となってしまう.

 $a_j^{(4)}$ $p_iq_j-p_jq_i \neq 0$ は欄外で示す。P,Q の代表元を適当にとって \mathbb{A}^3 のベクトルと見よう。 $p_iq_j-p_jq_i = \det \begin{bmatrix} p_i & q_i \\ p_j & q_j \end{bmatrix}$. したがってこれがすべての i,j で 0 になるということは,P,Q が \mathbb{A}^3 のベクトルとして平行であることと同値である。今 \mathbb{P}^2 の元として $P \neq Q$ としていたから, $p_iq_j-p_jq_i \neq 0$.

 $[\]varepsilon = 0, \varepsilon^2 = 0 \text{ Logar}, \ F \in k[x] \text{ LowT} F(a + \varepsilon) = F(a) + F'(a)\varepsilon.$

(b) A Map $P \mapsto T_P(Y)$ Defines a Morphism $\operatorname{Reg} Y \to (\mathbb{P}^2)^*$.

写像 α を $(a_0:a_1:a_2)\mapsto a_0x_0+a_1x_1+a_2x_2=0$ としておく.これによって \mathbb{P}^2 と $(\mathbb{P}^2)^*$ は同一視される.(問題文では明示されていないが,おそらくこれは定義の一部である.)示すべきことは以下の写像が morphism であること.

$$\phi: \operatorname{Reg} Y \to (\mathbb{P}^2)^*$$

$$P \mapsto T_P(Y) = \alpha(\nabla f(P))$$

ただし $\operatorname{Reg} Y$ は Y の nonsingular な点全体である. α は同型写像だから $\alpha^{-1}\circ\phi=\nabla f$ が morphism であることが示せれば良い. 適当に \mathbb{P}^2 の affine open covering をとって Lemma 3.6 を適用すればこのことが得られる.

(c) The Dual Curve.

(問題ではないが次の問題で使うので書いておく.) 上で定義した ϕ の像の closure を Y の dual curve と呼ぶ. すなわち, Y の dual curve は以下のもの.

$$\alpha \left(\operatorname{cl}_{\mathbb{P}^2} \left(\left\{ \nabla (f)(P) \mid P \in \operatorname{Reg} Y \right\} \right) \right).$$

 $\partial_{x_i} f$ は d-1 次斉次式だから、 $\{\}$ 内は次のイデアルの零点だと言える.

$$I_{DC} = (\{\partial_{x_i} f \cdot x_j - \partial_{x_i} f \cdot x_i\}_{i,j=0,1,2}).$$

(このイデアルの生成元は $P \in \operatorname{Sing} Y$ ですべて 0 になる.) したがって $\{\}$ は閉集合であり, I_{DC} が Y の dual curve の定義イデアル.

Ex7.4 Lines which Meet Y Extactly in d Points.

Y:: curve in \mathbb{P}^2 , $d := \deg Y$ とする. さらに写像 α を $(a_0:a_1:a_2) \mapsto a_0x_0 + a_1x_1 + a_2x_2 = 0$ としておく. $U \subset \mathbb{P}^2$ を $\alpha(U)$ の元(直線)が Y と丁度 d 個の点で交わるようなものとしよう. この時,U:: nonempty open subset を示す.そのために U^c :: proper closed subset を示す.

直線 $L \in (\mathbb{P}^2)^*$ を考える. $Y \cap L = \{P_i\}_{i=1}^r$ としよう. Cor7.8 と,直線の degree が 1 であることから,

$$\sum_{i=1}^{r} i(Y, L; P_i) = d.$$

したがって交点が d 個,すなわち r=d であることと,すべての i について i(Y,L;P)=1 であることが同値であることが理解る.任意の L について $i(Y,L;P)\geq 1$ だから,Ex7.3 と合わせて以下が理解る.

 $L \in \alpha(U^c) \iff {}^\exists P \in Y \cap L, \ i(Y, L; P) > 1 \iff [{}^\exists P \in \operatorname{Reg} Y, \ L = T_P(Y)] \vee [{}^\exists P \in \operatorname{Sing} Y, \ P \in L].$

この 2 条件のうち、 $\exists P \in \text{Reg } Y, L = T_P(Y)$ を満たす L 全体は

$$\alpha(\{\nabla(f)(P) \mid P \in \operatorname{Reg} Y\})$$

と書ける.これは $\operatorname{Ex7.3}$ の結果の言い換えである. $\operatorname{Ex7.3}$ の解答で示したとおり,これは $\mathcal{Z}_p(I_{DC})$ と書ける閉集合.さらに $^\exists P \in \operatorname{Sing} Y$, $P \in L$ を満たす L 全体を考える.各 $P \in \operatorname{Sing} Y$ に対して,P を通る直線全体は次の集合である.

$$\left\{\sum q_i x_i = 0 \mid \sum q_i p_i = 0\right\} = \alpha(\left\{Q \mid (P,Q) = 0\right\}) = \alpha(\mathcal{Z}_p(\alpha(P))).$$

以上より,

$$U^c = \mathcal{Z}_p(I_{DC}) \cup \left(\bigcup_{P \in \text{Sing } Y} \mathcal{Z}_p(\alpha(P))\right).$$

Y が曲線であることと Sing Y が Y の proper closed subset であることから Sing Y は有限集合. だから U^c は closed subset. proper であること, すなわち $U^c \neq \mathbb{P}^2$ であることは \mathbb{P}^2 の既約性による.

Ex7.5 An Irreducible Curve of Degree d > 1.

(a) "cannot have a point of multiplicity $\geq d$ ".

Y:: irreducible curve in \mathbb{P}^2 , $\deg Y=:d>1$ とする. このとき, Y は斉次既約多項式 $F\in k[x,y]^h$ で表すことができる。そして $\deg Y=d=\deg F$ が成り立つ(Porp7.6d).

 $U_z=(\mathcal{Z}_a(z))^c$ とする. 点 $(a:b:1)\in Y\cap U_z$ での multiplicity を考えよう. F を z について非斉次 化したものを f とする. 明らかに $\deg f\leq d=\deg F$. さらに $(x,y)\mapsto (x-a,y-b)$ と平行移動した ものを f' とする. この変換は 1 次変換だから $\deg f'=\deg f$. Ex5.3 で定義されている multiplicity は $(\mathbb{A}^2$ の曲線にしか定義されていないが) $\mu_{(a:b:1)}(Y)=\operatorname{ord} f'$.

$$d = \deg F \ge \deg f = \deg f' \ge \operatorname{ord} f' = \mu_{(0,0)}(\mathcal{Z}_a(f')).$$

よって Y の点 (a:b:1) における multiplicity は d 以下.

さらに,等号が成り立つと仮定しよう.すると f' は $k[x,y]^h$ の斉次 d 次多項式となる.この時 f' は重複を含めて d(>1) 個の斉次 1 次多項式の積に分解できるから, $\mathcal{Z}_a(f')$ は irreducible になり得ない.しかし $Y\cap U_z$ から $\mathcal{Z}_a(f')$ への変換は irreducibility を損なわない. $^{6)}$ なので等号は成り立たず, $\mu_{(a:b:1)}(Y)=\deg f'< d$.

(b) "is a rational curve".

Y :: irreducible curve, $\deg Y=:d>1$ とする. ある点 $P\in Y$ において $\mu_P(Y)=d-1$ であるとき, Y :: rational curve となることを示す.

調べたいのは $K(Y)\cong K(\mathbb{P}^1)$ か否かということなので、Prop4.9 を用いて Y を \mathbb{P}^2 の hypersurface とみなす。定義多項式を $F\in k[x,y,z]^h$ としよう。このとき Prop7.6d より $\deg F=\deg Y=d$. また、適当な射影変換によって $P\in Y$ は (0:0:1) へ写せる。すると仮定されているのは、f=F(x,y,1) が以下のように斉次分解出来るということである。

$$f = F(x, y, 1) = f_d + f_{d-1} = \prod_{i=1}^{d} (a_i x - b_i y) + \prod_{j=1}^{d-1} (c_j x - d_j y).$$

ただし $a_i,b_i,c_i,d_i\in k$ である。また, $\mathcal{Z}_a(f)(\equiv Y\cap U_z)$ が irreducible であることから,任意の i,j に ついて (a_i,b_i) と (c_j,d_j) は平行でない.仮に平行であるものがあればそれに対応する一次因子をくくり だして因数分解できてしまうからである.

任意の点 $(x,y) \in Y$ において次が成り立つ.

$$f(x,y) = \prod_{i=1}^{d} (a_i x - b_i y) + \prod_{j=1}^{d-1} (c_j x - d_j y) = 0.$$

 $^{^{(6)}}Y \cap U_z \to \mathcal{Z}_a(f)$ は Prop2.2 より同相写像で、 $\mathcal{Z}_a(f) \to \mathcal{Z}_a(f')$ は平行移動なので同相写像.

したがって次が得られる.

$$a_d x - b_d y = -\frac{\prod_{j=1}^{d-1} (c_j x - d_j y)}{\prod_{j=1}^{d-1} (a_j x - b_j y)} =: G(x, y).$$

 (a_i,b_i) \forall (c_j,d_j) であるから G の分子分母に共通因子はなく,G の分子分母は共に斉次式.なので G(x,y)=G(x/y,1).今, $a_d\neq 0$ と仮定し,t=x/y とする. $(a_d=0$ の時は t=y/x とする.) すると $y\cdot (a_dt-b_d)=G(t,1)$ となるから,結局次の birational map が得られる.

$$\begin{array}{cccc} \phi: & Y & \xrightarrow{\cong} & \mathbb{P}^1 \\ & (x,y) & \mapsto & (x/y:1) \\ & \frac{G(t,1)}{a_dt-b_d}(t,1) & \hookleftarrow & (t:1) \end{array}$$

 $rac{G(t,1)}{a_dt-b_d} = -rac{\prod_{j=1}^{d-1}(c_jt-d_j)}{\prod_{j=1}^{d},(a_jt-b_j)}$ である.スカラー倍を用いて書いているので注意せよ.

Ex7.6 Linear Varieties.

Y :: algebraic set in \mathbb{P}^n の各 irreducible component の次元が r だとする. $\deg Y=1\iff Y$:: linear variety, を示す. Y の irreducible components を $\{C_i\}_{i=1}^s$ とし、 $\mathfrak{p}_i=\mathcal{I}_p(C_i)$ ておく.

(a) Proof of $\deg Y = 1 \implies Y$:: linear variety

 $M=S/\mathcal{I}_p(Y)$ に対して Them7.7 の証明の後半と同じ議論をすると,M の Hilbert polynomial は以下のようになる.

$$P_M(z) = \sum_{i=1}^s \mu_{\mathfrak{p}_i}(M) \cdot P_{S/\mathfrak{p}_i}(z).$$

すべての i に対して $\dim C_i = r$ であるから, $\deg P_{S/\mathfrak{p}_i}(z) = r$. したがって leading cofficient を足すことにより,以下が理解る.

$$1 = \deg Y = \sum_{i=1}^{s} \mu_{\mathfrak{p}_i}(M) \cdot \deg C_i \ge s \ge 1.$$

よってs=1 すなわちY:: variety が得られる.

 $\mathcal{I}_p(Y)$ の生成元を g_1,\ldots,g_t,g とする. $\mathcal{I}_p(Y)$ は素イデアルだから,これらはすべて既約である. $d=\deg g$ としておく.さらに $Y^-=\mathcal{Z}_p(\{g_1,\ldots,g_t\})$ としよう. Y^- が irreducible とは限らないことに注意せよ.すると Them7.7 の証明の前半と同様の議論が使える.以下は完全列である.

$$0 \to (S/\mathcal{I}_p(Y^-))(-d) \to S/\mathcal{I}_p(Y^-) \to M \to 0.$$

よって $P_M(t)=P_{S/\mathcal{I}_p(Y^-)}(t)-P_{S/\mathcal{I}_p(Y^-)}(t-d)$. なので Them7.7 の証明の前半から $\deg Y=1=\deg Y^-\cdot d$. このことから d=1 が得られる. g は $\mathcal{I}_p(Y)$ の生成元のいずれでも良いから, $\mathcal{I}_p(Y)$ は一次 斉次多項式で生成される. 以上から Y :: linear variety.

(b) Proof of $\deg Y = 1 \iff Y ::$ linear variety

Y が hyperplane であるときは Prop7.6d より $\deg Y=1$ は明らかである。 $\operatorname{Ex2.11a}$ より,Y:: linear variety であるとき Y は hyperplane の交わりとして書ける。 さらに $\operatorname{Ex2.11b}$ より, $\mathcal{I}_p(Y)$ は (t:=)n-r 個の(線形独立な) 一次斉次多項式で生成される。 その多項式を h_1,\ldots,h_t としよう。 $I_i=\langle h_1,\ldots,h_i\rangle$ としておく。 同時に $Y_i=\mathcal{Z}_p(I_i)$ としておく. $I_{i+1}=I_i+(h),Y_{i+1}=\cap\mathcal{Z}_p(h_{i+1})$ に注意せよ.

 $\deg Y_i = 1$ ならば $\deg Y_{i+1} = 1$ であることを示す。intersection multiplicity と degree は 1 以上の値だから,Them7.7 より $\deg Y_{i+1} = (\deg Y_i)(\deg \mathcal{Z}_p(h_{i+1}))$.仮定より $\deg Y_i = 1$ で,Prop7.6d より $\deg \mathcal{Z}_p(h_{i+1}) = \deg h_{i+1} = 1$ なので主張が示された.

Ex7.7 The Closure of the Union of All Lines from Nonsingular Point.

Y :: variety in \mathbb{P}^n , dim Y=r, deg Y=d>1 について考える. $P\in Y$:: nonsingular point として, X を以下のように定める.

$$X = \operatorname{cl}_{\mathbb{P}^n} \left(\bigcup_{Q \in Y - P} L_{PQ} \right).$$

ただし L_{PQ} は二点 P,Q を通る直線で, $L_{PQ}=\{uP+vQ\mid (u:v)\in\mathbb{P}^1\}$ と書ける.射影変換を用いて $P=(1:0:\cdots:0)$ とする.

■X の別表現. $\tilde{X}=\bigcup_{Q\in Y-P}L_{PQ}$ としよう. $R\in \tilde{X}$ を任意にとると, L_{PR} は P と異なる Y 上の点を通る.逆に, L_{PR} が P と異なる Y 上の点を通らなければ R は \tilde{X} の元でない. $R\in \mathbb{P}^n$ に対し, $L_{PR}\cap Y$ の元は Ex7.3 の議論と同様に以下の集合に一対一対応する.

$$(\{P\} \subseteq) \mathcal{Z}_p(\{f(uP+vR) \mid f \in \mathcal{I}_p(Y)\}) (\subseteq \mathbb{P}^1).$$

 l_{PR} を $f \mapsto f(uP + vR)$ なる準同型とすれば,

$$\tilde{X}^c = \left\{ R \in \mathbb{P}^n \middle| \sqrt{l_{PR}(\mathcal{I}_p(Y))} = (v) \right\}.$$

- (a) $X :: \text{ variety, } \dim X = r + 1.$
- ■X:: variety. X:: irreducible を示す、 $X = C \cup D$ となる C,D:: closed in X が存在したとしよう、 $C' = Y \cap C, D' = Y \cap D$ とおくと $Y \subset X$ なので C',D':: closed in Y. そして $C' \cup D' = Y \cap (C \cup D) = Y \cap X = Y$ となる、したがって Y が irreducible でないということになり、これは仮定に矛盾する、よって X:: variety.
- ■道具 $Z \subset X$ に対して $\hat{C}(Z) = \operatorname{cl}_{\mathbb{P}^n}\left(\bigcup_{Q \in Z-P} L_{PQ}\right)$ とおく. (cone のつもりで C とした.) $\hat{C}(Y) = X$ で,また Z が irreducible ならば前段落と同様の議論により C(Z) も irreducible である. Ex2.10 で定義された cone を C(Y) で書く.
- ■ $\dim X = r+1$. $\hat{C}(Y) \cong C(Y)$ を示そう、この結果と Ex2.10c, Ex3.12 から $\dim \mathcal{O}_{P,\hat{C}(Y)} = \dim \mathcal{O}_{P,C(Y)} = \dim C(Y) = r+1$ のように主張が示せる、以下が birational map になる、

$$\xi: \qquad \hat{C}(Y) \qquad \rightarrow \qquad C(Y)$$

$$P + t(1:q_1:\dots:q_n) \quad \mapsto \quad t(1,q_1,\dots,q_n)$$

$$P + (r_0:r_1:\dots:r_n) \quad \leftrightarrow \quad (r_0,r_1,\dots,r_n)$$

(b) $\deg X < d$.

この問題では Y を irreducible と限らない algebraic set とする. $\dim Y$ についての帰納法で示そう.

■Case $\dim Y = 0$. $\dim Y = 0$ の時,Y は d 個の点で, $X = \hat{C}(Y)$ は d-1 本の直線. したがって $\deg \hat{C}(Y) = \deg Y - 1 < \deg Y$ となる.

- ■Induction Hypothesis. r>0 について、 $\dim Y=r-1$ の時 $\deg \hat{C}(Y)<\deg Y$ であるとする. 以下、 $\dim Y=r$ の場合にもこれが成り立つことを示す.
- ■Case $\dim Y = r+1$. H:: hyperplane in \mathbb{P}^n , $P \in H$ とする. $X \cap H$ の irreducible component を $\{Z_j\}_{j=1}^t$ とすると,うまく H をとることですべての j について $i(X,H;Z_j)=1$ であるように出来る(?). (この条件は Them7.7 より $t=\deg X$ と同値である.) そのとき,Them7.7, Prop7.6b より以下 が成り立つ.

$$\deg(X \cap H) = \sum_{j=1}^t \deg Z_j = \sum_{j=1}^t i(X, H; Z_j) \cdot \deg Z_j = \deg X \cdot \deg H = \deg X.$$

一方, $Y \cap H$ の irreducible component を $\{W_j\}_{j=1}^s$ とすると, Ex1.8 (の類似) より dim $W_j = r-1$. その degree は再び Them7.7, Prop7.6b より以下のようになる.

$$\deg(Y \cap H) = \sum_{j=1}^{s} \deg W_j \le \sum_{j=1}^{s} i(Y, H; W_j) \cdot \deg W_j = \deg Y \cdot \deg H = \deg Y = d.$$

H は P を含む hyperplane だから H=C(H). したがって $X\cap H=\hat{C}(Y)\cap\hat{C}(H)=\hat{C}(Y\cap H)$. しかも $\dim Y\cap H=r-1$ だから,induction hypothesis より $\deg(X\cap H)<\deg(Y\cap H)$. 以上より,以下の不等式が得られる.

$$\deg X = \deg(X \cap H) < \deg(Y \cap H) \le \deg Y.$$

Ex7.8 A Variety of Degree 2 in \mathbb{P}^n .

Y:: variety in \mathbb{P}^n , $\deg Y=2$ とおく. Y に対して $\operatorname{Ex7.7}$ の方法で構成される variety を X としよう. すると $\operatorname{Ex7.7b}$ より $1 \leq \deg X < \deg Y=2$ なので $\deg X=1$. $\operatorname{Ex7.7a}$ から $\dim X=\dim Y+1$. $\operatorname{Ex7.6}$ より,X は linear variety である. 以上より,Y は $\dim X=\dim Y+1$ の linear variety に含まれている.